

(講演)「若手研究者へのメッセージ：一離散最適化研究者の回想」  
(SOTA@つくば, 筑波大学, 2012年6月30日)

-----  
< 本講演の補足 >

講演を聞いていただくために準備したスライドなので、スライドだけでは分かりづらい点や書き落した点について補足したいと思います。

Pages 4–18: まず、最初の方でお話した「末川博先生」について。末川先生は、1933年の京大事件(滝川事件)によって京大教授の職を辞した著名な民法学者で、私の卒業した岩国高等学校の大先輩であり、私が京都大学に在学中に、京都の岩国高校OB会のコンパにほとんど毎回出席されてお話を伺う機会があって、その際に感銘を受けたものの一つが「運・鈍・感」です。東大の助手のころから機会を見つけて学生に話をしてきました。

Page 40: 明るい場所と暗い場所これは良く知られた笑い話ですが、夜に街灯の下で何か探しものをしている人を見かけて、「どうしましたか?」と尋ねると、「落し物をしたので探しています」と言われて、「この辺りに落としたのですか?」とさらに尋ねると、「ここではなさそうですが、ここが明るいので、ここを探しています」というお話のことを意味しています。研究についても、ややもすると本来目指すべき難しい問題(暗い場所)を置いておいて、目指すべき問題から離れた易しい問題(明るい場所)に取り組むことで自己満足する危険性を指摘したかったところです。

Page 24: 「ライフワーク」と「生きるための研究」上記の「明るい場所と暗い場所」の問題があるのですが、「ライフワーク」とする難しい問題一筋に取り組むだけでは、何も成果がなく一生を終わる恐れがありますし、「生きるため」には、易しい問題(明るい場所)に取り組んで小さな成果でも積み上げていく必要があります。さらには、そのような成果の積み上げの過程で「ライフワーク」の問題でのブレイクスルーのきっかけを掴むことが出来るかも知れません。その意味で、「生きるための研究」であることを認識した上での、明るい場所での「生きるための研究」も多いに追求することをお勧めしたい。

Page 44: 「人生は、「運・鈍・感」でたどる非決定性過程である。」これは、人生におけるあらゆる意思決定に伴う様々な可能な展開の中で現在に至る道は一つであるが、自分自身の中では、あらゆる可能な展開が同時に実在するという「量子物理学的な気持」を表現したものです。(もしかすると量子物理学的に正しいのかも知れないのですが、半ば冗談で話しているので、あまりまじめに考えなくて結構です。)

Pages 44–53: 「巡り会い」という観点で、振り返ってみたのですが、挙げるべき重要な方々が抜け落ちていることをお許しいただきたく存じます。特に、最初の出会いのときに学生であった多くの人達に対しては、そうです。その中でも、室田一雄氏（現東大教授）については、東大のときに私の学部の講義を受講していますが、その後、筑波大学で一時期教員として同僚であり、私が大阪大学を経て数理解析研究所へ転任した際の前任者です。彼が「離散凸解析」を展開し始めた1990年代後半から、研究上大きな影響を受けて今日に至っています。

-----  
この場を借りて、これまでに一緒に共同研究をさせていただいたすべての方々に心から感謝申し上げます。（研究一覧はホームページから見られます。）  
-----